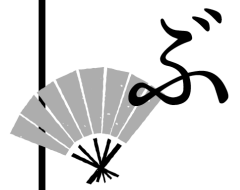


# 古典落語



# に学



落語家  
立川談四楼

## 第十二回 饅頭怖い

### か

つて砂糖は貴重品でした。この落語には砂糖を使った甘いものへの憧れがあります。今はまるで逆ですね。

太る、糖尿病になる、カロリーが……と、甘いものは災難です。でも食後のデザートとしてはいいものです。私は高座の前に食事をする時間がない折に、チョコレートを食べることがあります。エネルギーの補充のためであり、口が滑らかなになるような気がするからです。

以上のことがこの噺のマクラになります。普通に「十人寄れば気は十色と申しまして」と入り、人の趣味嗜好を語る方法ももちろんあるのですが。

「若えもんが集まったのはいいが、退屈だ。どうだい、それぞれの苦手なもの、怖いもの言いつこをするってのは」

「いいねえ。オレは蛇が怖い」「まともだね、そっちは?」「カエル」「お次は?」「ナメクジ」「変なものが怖いんだね。あんたは?」「ありんこ」「地べたを這ってるあのアリか? あんなものが怖いか」「怖いよ、こっちからアリが一匹歩いてくるだろ。こっちからも一匹。で、すれ違いざまにコチョココチョって話して別れんだろ。あれ、オレの悪口言ってるんだ、怖いよ」

### と

その時、怒ったのが熊さん。  
「いい加減にしろ。あれが怖いのが怖いのか、これか怖いのかって情

けねえヤツらだ」

「あれ熊さん、怖いものないの?」

「オレは怖いもんなんざねえ。誰だ、蛇が怖いって言ったのは。場違いな鰻を食うよりよっぽど旨えや。オレなんざ頭が痛い時には鉢巻の代わりに蛇を締めるんだ。向こうで締めてくれるから楽なもんだ」

「じゃカエルは?」「串焼き」「ナメクジは?」「三杯酢」「みんな食っちゃうんだ」「ありんこを持ってこい。強飯(赤飯)を食う時に胡麻塩のねえことがあるよな、ありんこをかけて食っちゃもうんだ。胡麻が歩いて食いにくいが」

と、突然うなだれる熊さん。

「どうしたの?」「怖いものを思い出した」「なんだあるんだ。何が怖いのか?」「まんじゅう」「食う饅頭かい?」「そう。オレは饅頭だけはダメなんだ。ああ気分が悪い」「真っ青だよ。誰か隣の部屋へ寝かしてやんな。寝たかい?」「じゃあ、みんな集まれ」「何だい」「ヤなヤツだろ、熊公。人が右ってえと左ってんだぜ。一つ懲らしめてやろう。みんな、饅頭買ってこい」「どうすんの?」「ヤツの枕元へ置いて悶えさせるんだ」「よせよ。あんなに怖がってるんだ。そんなことすると死ぬよ」「いいよ死んだって」「でも饅頭で殺すとあん(餡)殺になる」

「ずいぶん買ってきたな。ではこれを枕元に置いてと。で、こっちの部屋から声をかけよう。おーい熊さん、具合はどうだ?」

「何だか近くに饅頭があるような気がする」「その近くを見たらどうだい?」「うーん、あ、饅頭だ。怖いよー、怖いよー」「いいね、怖がってるよ」「あー栗饅頭怖い。あ、中は白餡だ。怖いよー、ムシャムシャ」

「あ、あいつ怖いって言いながら食ってるよ。で、残りは懐へ入れてるぜ。やいこのヤロー、怖いって饅頭を食うやつがあるか。おまえ本当は何が怖いんだ?」「ああ、この辺で濃いお茶が一杯怖い」

## いいオチ

ですよね。時間があれば登場人物を増やせます。そして怖いものを

次々に言わせるのです。この噺の典故は昔の中国で、国語の教科書に載っていたのを覚えていきます。

## 落語家

や落語ファンは怖いをよく使います。蕎麦が怖いね」「うん、丁度怖いと思っ

てたところだ」。じゃあ、と連れ立って蕎麦屋に入るのは。何が怖いかを考え、言葉遊びを楽しんでください。